不定期刊行　　第 479 号　2013.02.11

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

旅費問題について県教委と懇談

かわらばん 476 号で触れた旅費問題のその後について報告する。1 月 7 日に行われた長野県高等学校教職員組合（以下高教組）と長野県教育委員会（以下県教委）の今年度の確定交渉の場で山岳部の旅費問題については、懇談の機会を持つことになっていた。それを受け、高教組に間にはいってもらい、2 月 5 日に県教委との間で懇談を持った。以下にその内容をまとめた。なお、担当者の名前については職名とした。

大きな前進は、今後もし現場で旅費支給に不都合な点があれば県教委として研究をし、そのうえで我々と話す機会を持つことが確約された点である。またこれまで現場で曖昧にされてしまった例もあった入浴代について、すでに決着済みということを県教委が明言したのも大きな点であった。質問等があれば、高教組側の 4 名の出席者に遠慮なくお問い合わせいただきたい。ただし、現在一部定額支給されていない学校の食卓費については微妙な問題もあり、下に書いてあるような内容までしか踏み込むことができなかった点をご理解ください。

山岳部旅費をめぐっての県教委高校教育課との懇談まとめ（文責：大西）

期日：2 月 5 日　１６：００～１７：００　場所：県庁 8 階会議室にて

県教委側（3 名）

県教委高校教育課：管理係主幹指導主事　教職員係課長補佐　教職員係主事

高教組側（4 名）

細尾高教組副委員長、下岡県執、酒井県高体連専門委員長、大西県高体連専門委員

相互に自己紹介の後、こちらからこの問題が高体連登山専門部の会議の中でとりあげられた経緯と、高教組に間に入ってもらう中で、このような懇談の機会を設定されたことに謝意を示し、現在の山岳部の状況、実情の説明をした。特にテント泊という山岳部の引率の特殊性について改めて理解を求めた。その上で、旅費支給にあたっては、Q＆A集では想定外のこともありうるので柔軟な対応をお願いしたいことを最初に要請した。

県教委からは、何か不都合があれば具体的な事例で話してほしいと言われたので、最初に昨年から有料化されたトイレ代について領収証をもらうことは不可能なことを説明。さらに個別事例として、支払いの事実を証明できない無人の避難小屋に泊まった場合などの実例を示し、領収証払いに矛盾があることを述べ、研究をしてほしい旨を伝えた。

また、2006 年県教委の「山岳部の旅費雑費の支給について」を巡って、実際の物品について「・・・等」と書かれていることの意味は、個別の物品等が出てきた場合には話には応ずるということであったはずだという当初の約束の確認を行った。県教委としては拡大解釈はできないというスタンスがありありであったが、今後も話には応じてほしいと要請した。

風呂代について、現場で若干混乱が生じていることについて、「これはすでに決着済みの話である」と言ったところ、教職員係主事から「そう認識している」という発言があった。これについて、教職員係課長補佐からは当時どのように周知されたのかと問われ

たので、「文書にはなっていないが、事務長会等で周知徹底されたはずだ。しかし、年月も経過し、人も変わっているので改めて機会を捉えて現場の事務方に連絡してほしい」とお願いした。

食糧については、一律生徒と頭割りという形での支給には不都合があることを主張した。生徒を安全に引率し、無事に出張を終えるために顧問としては予備食糧をはじめとして個人的な支出もあること、とりわけ経験の浅い顧問にとってテント泊は冒険であり、リスクも大きく食糧、医薬品等生徒とは別にもっていくようなことも多いので、こういう点についても研究してほしいと伝えた。

これらについて、県教委側から具体的な話には今後も応ずるということが約束され、今日の内容についても今後検討した結果などを話し合いたいということで話を終えた。

具体的な成果（確認事項も含む）

- **今後話す機会を設けるということで約束できた。**
- **入浴代について再確認し、現場に伝えてもらえる。**
- **領収証のとれないものがあるという認識を持ってもらえた。**
- **食費については安全面等の観点から生徒とは別に顧問の費用がありうるというこちらの主張を伝えた。**

厳冬期の霞沢岳

信高山岳会の２月例会山行で霞沢岳へ登った。メンバーは久根、塩川、大西の３人。9日、8：15釜トンネルを出発。長さ1310mの暗いトンネルを抜けると、焼岳の上に青空が広がっていた。我々が大正池の手前、国土交通省松本砂防工事事務所入り口のところでワカンを装着していると東京から来たという３人パーティがやってきて、相前後して出発した。タクシーの運転手の話で上高地入りする人は多いとのことだったが、霞沢を西北西尾根から目指すパーティは結局この２パーティのみであった。

それほど雪が多いようには思わなかったが、ラッセルが大変な山行だった。先日の雨の影響だろうか。クラストした５㎝ほどの氷板が表面を覆っており、それが割れると、その下はさらさらの雪の層があり気温が低いので全く固まらず足場が決まらない。1700m付近では、あのヤズィックアグルで三戸呂 がもがいて全然進まなかった最後の壁を彷彿とさせる状態の壁に行く手を阻まれた。久根さんと二人で必死で雪壁を崩して抜けた。テン場として予定していた1940m付近が、以前来た時よりずいぶん狭い感じがしたので、少し上へ行き過ぎてしまうという失態もあったが、14：00にはテントを張り終えた。

夜半から風が吹き出し、テントを揺らした。アタック日の10日は終日吹雪で、上部稜線では吹かれた。樹林帯は相変わらず踏む抜くとさらさら雪で、まことに始末の悪い雪の状態で、予想外に時間がかかったが、先行した３人パーティのラッセル泥棒で楽をさせてもらった。樹林帯を抜けた頂上稜線手前の岩稜で彼らに追いついたが、結局彼らは天候と技術力に自信がないということで、ここでリタイア。我々のためのサポートをする結果になったのは気の毒だった。僕らは10：30に頂上に到着。風とガスで視界はそれほど望めなかったが、厳冬期の2645mの頂上を我々だけが占領するのは悪い気分ではなかった。